

“MY TOWN” うおっちんで

歩キ目デス & 足ラテス

Vol.41

学校建築、講堂編

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー
岡崎 直司

愛媛県下に見られる戦前期の学校建築の中で、今回は「講堂」にスポットを当ててみたい。思い立ったら直ちに「講堂」!?

平成15年に刊行された愛媛県近代化遺産調査報告書によると、県内には8棟の講堂が残されていることが分かっている。民間企業の建てたものや、その他の公共施設も入れると、15棟の講堂が残存するが、ここでは学校建築のみご紹介。

建築年の古い順に始めよう。

まず、現存する県下最古の講堂建築は、大正4年に建てられた旧宇和町尋常高等小学校。ただし、西予市宇和町にあるこの講堂は、当初の建築場所では

旧魚成尋常高等小学校



旧制松山高等学校



旧宇和町尋常高等小学校



旧制三島中学校



旧西条農業学校



旧宇和町尋常高等
小学校内観

なく、再々移築の運命をたどり現在に至る。元は、中町の町並みの山際、坪ヶ谷にあり、昭和初期に当時の清水伴三郎町長によって、新たな宇和町小の建設に際し、移築されたのだった。ところが、昭和の終わりに旧宇和町小学校の校舎保存運動があり、関係部局の苦勞の末、今の米博物館に。その際、写真の如く、天井の照明や屋根裏のトラス構造が見られるように改造されて、通常は柔剣道の武道場として活用されている。

続いて、大正9年の西条農業高校の講堂を紹介。基礎を煉瓦積みとし、外壁がピンクのペンキで塗装された大正モダニズムの建築。時代背景として、婦人公論(同5年)や主婦の友(同6年)、あるいは新青年(同9年)などが相次いで刊行された、大正デモクラシーの頃。何となく明るい気風が伝わってくる。

同11年には、本格的な西洋建築でも言うべき旧制松山高校の講堂が登場する。先述の宇和町小も西条農校も、それぞれ入母屋屋根、寄棟屋根の瓦葺きで和風を基調としたが、こちらは、正面にトスカナ式円柱8本を堂々と配し、上下スライドの縦長窓や内部の意匠も洋風でまとめられている。一高、二高などのナンバースクール制から、大正8

年に新潟、松本、山口などと共にネームスクール制となつて開設される。京都三高から招聘された初代校長由比質は、質実剛健な中にも自由自主を尊重した校風を打ち出したとされる。今も、愛大付属中学校の講堂として、入学式、卒業式、あるいは少年式の会場となる。国登録有形文化財。

同13年には旧制三島中学校（現伊予三島高校）の講堂が建設される。設計は、やがて昭和3年に完成することとなる松山測候所（現松山地方気象台・国登録有形）も手がけた戸村秀雄とされる（仙波勝利氏調査）。戦後のベビーブームによる生徒数増加によって昭和34年に増改築され、プロポジションは南北方向に伸びたが、幸いにもまだ現役で活用されている。

昭和10年には、西予市城川町に魚成尋常高等小学校の講堂が完成し、戦後の校舎移転の後、現在は地元の縫製工場として活用され何とか残っている。

翌11年には、砥部尋常高等小学校の講堂（研南館）が建てられた。これも学校としての使命を終え、今は時に武道場としての活用程度となっているが、正面外観のアカンサス装飾も見所。

同14年には、時代背景を物語る上須戒青年学校明玄農士道場が大洲市の山

旧上須戒青年学校明玄農士道場



旧上須戒青年学校明玄農士道場内観



旧上浮穴農林学校知今堂

花頭窓及び黒壁は戦時迷彩の名残り



旧砥部尋常高等小学校

間部に誕生する。外観は和風で、正面頭上には禅宗様式に見られる火灯（花頭窓）が施され、農の土を養成する精神的な道場、という側面が色濃く反映されている。不思議なのは、内観が打つて変わつて洋風であること。現在は、大洲少年自然の家として活用されている。

同19年には、上浮穴農林学校の講堂が建築される（現久万高原町）。地元の篤志家船田一雄の寄付により建設され、上浮穴高校の講堂として今もあるが、老朽化により、歴史遺産活用としては不十分かも知れない。

以上、県下における残存する講堂群8棟を見てきた訳だが、今も学校敷地内にそのまま残るのが4棟、学校は移転したが取り合えず残ったものが3棟、移築が1棟である。これらを多いと見るか、少ないと見るかは見方で変わってくるが、いずれにしても、戦後教育の中で、記念式典の会場としての使用が主体だった講堂は、いつの間にか体育館にとつて変わられ、スポーツに主体性を置くことで、それらの殆どが各地域から消滅する道をたどった。精神性の良し悪しはあるが、単にハコモノと云うなかれ、体育館での式典にはどこか効率や便宜上の匂いがするのは偏見だろうか。